

(第96回) 歌舞伎「吉例顔見世大歌舞伎」

11月17日(第二部) 歌舞伎座

新型コロナウイルスの影響で1年振りの歌舞伎座訪問である。やはりどこか寂しい感じがする。一門の女将さんの出迎えはなし。3Fののれん街も閉鎖中。歌舞伎座特有の華やいだ雰囲気がいま一つである。観客は2〜3割の入りだろうか。テレビで見る大相撲やプロ野球の入りより大分少なく思えた。新型コロナウイルスの感染が収まり一日も早く通常営業に戻る事を祈るばかりである。

感染予防には万全の注意を払っているように思えた。しかし、国立劇場の歌舞伎公演で片岡孝太郎に新型コロナウイルスのPCR検査で陽性反応が確認され、11月23日からの公演の一部が中止に追い込まれている。歌舞伎座で感染者が出ない事を願っている。

そのような中、公演も変則スタイルで営業している。四部構成で公演時間は各部約1時間で、その度に観客は総入れ替え制である。

今回、観劇したのは「**身替座禅**」。恐妻家の夫がその浮気がばれ、妻にやり込まれるという古今東西、夫婦がある限りの永遠のテーマを愛情深く、格調高く演じている。日本経済新聞の歌舞伎欄では「菊五郎の山影右京に左團次の奥方、権十郎の太郎冠者で『身替座禅』の安定感」はコロナ砂漠中のオアシス」と評している。



恐妻家の大名・山影右京(尾上菊五郎)には花子という恋人がいる。花子との逢瀬を企むが奥方玉ノ井(市川

左團次)の監視が厳しく中々家を抜け出せない。そこで一計を案じる。持仏堂で一晩座禅を組むので見舞に来ないで欲しいと申し出て、玉ノ井(市川左團次)の了承を得る。実は太郎冠者(河原崎権十郎)に座禅衾(ざぜんふすま)を被らせ、見替にし、家を抜け出し、花子との逢瀬を叶えるという企てである。

企ては見事成功!逢瀬を叶え、ほろ酔い加減で帰宅した右京(尾上菊五郎)は座禅衾(ざぜんふすま)を被った太郎冠者(河原崎権十郎)に逢瀬の報告を始める。しかし、座禅衾(ざぜんふすま)の中は、見舞に来ないと約束したが、夫が心配で持仏堂に来た玉ノ井(市川左團次)だった。逢瀬の様子を得意げに語る右京(尾上菊五郎)と、衾の下で怒りに震えながら聞いている玉ノ井(市川左團次)の対比が最大の見せ場である。又、この場面では中竿三味線の常磐津と細竿三味線の長唄の掛け合いが何とも小気味よい。嫉妬に燃えた玉ノ井(市川左團次)が右京(尾上菊五郎)を追い回して幕となる。

喜劇味に溢れ、且つ格調高い舞台を堪能した。このテーマは万国共通で、歌舞伎の海外公演では度々演ぜられ、いつも大好評であるとイアホンガイドが教えてくれた。

夫婦にとっては浮気はご法度。円満が第一。コロナ禍で離婚が増えているとのニュースもある。夫婦愛を謳った詩をご紹介します。

- ・ 幸せになりたいの
- ・ 嫌よ。貴方と別々に
- ・ なんて・・・、そんなの私
- ・ じゃないから。一生
- ・ 愛する人は貴方
- ・ だからお願い。

反対からも読んでみて下さい。

皆様のご家庭は大丈夫ですよ。

当日は、一部から四部でアイアン・クラブ会員ならびにご家族の方が22名参加されました。

(織田 文雄・記)